

富山大学 教養教育院

令和4年度 第3回

# FD研修会報告

Faculty Development Report

# FD



## 目 次

開催趣旨と総括	1
講演に関する質疑応答の要約	2
講師への追加質問とそれに対する回答	5

### 参考資料

- ・FD 研修会での説明スライド
- ・開催要項
- ・参加状況
- ・参加者アンケート

## 開催趣旨と総括

令和4年度教養教育院FDシリーズ「教養教育の更なる充実をめざして」第3回研修会は、対面・オンラインミーティングのハイブリッド方式で10月28日に開催されました。今回は、山形大学学士課程基盤教育機構の千代勝実教授をお招きして「直接評価による卒業時の質保証～基盤力テストの到達点と今後の展望～」との演題で講演をしていただきました。

県内4か所のキャンパスに分かれた6つの学部から成る山形大学は、東北北海道で3番目に大きな国立大学です。そこで学ぶ1学年1700人の学生全員を対象として、学士課程基盤教育機構の先生方が進めてこられた取り組みについて詳しく教えていただきました。そのなかから聞き手にとってとくに刺激的だったのは以下の三つではないでしょうか。

一つ目は令和5年度から必修化される導入科目と基幹科目です。「教員が教えたいことを教える」から「大学として教える必要最小限」へ方針を転換し、学士課程基盤教育機構の専任教員を中心として、すでにカリキュラムの規格化・標準化・直接評価が軌道にのっているようです。従来の教養教育が「アラカルト」、山形大学の取り組みが「パッケージ化されたバランス定食」というたとえも明快でした。今後はさらに「一品は一味抑えたコース料理」を目指して、他でも応用できるように授業の順序や依存性を意識して評価検証を進めておられるとのことでした。

二つ目は、学生自身がたてた学修目標の到達度を学士課程基盤教育機構の教員が定期的にメンタリングするという「みずから学ぶ」取組です。学生自身の自己管理はもちろん、ICTの助けを借りつつ学生と教員のコミュニケーションも強まっているようです。

三つ目は、各年次の区切れ目に全学に対して実施する基盤力テストです。学士課程基盤教育機構では100問ほど作成したなかから30～40問を精選し、解答者のレベルに応じて出題の順序や解説を工夫しておられると伺います。このテスト問題が、複数の他大学でも導入されるようになったのもうなずけます。

これらの取り組みを迅速に進めていく実施体制についても、本学の参考になりそうです。統括教育ディレクター会議で速やかに決定された方針のもと、学士課程基盤教育機構の専任教員4名が中心となって、各学部の新任教員らに授業を担当させるというのです。新任教員が大学の方針を理解することや教育スキルを向上させることにもつながりそうです。

4年間という限られた時間を可能な限り有効に活かし、これからの大変な時代に社会人となる学生に確かな基礎力を身に付けさせようと力を尽くされる千代先生の熱意が伝わり、本学でも改革への意欲を大いに沸かたてられるFD研修会となったのではないのでしょうか。

教養教育院教育改善推進委員会委員  
上田 理恵子

## 講演に関する質疑応答の要約

—全学対象のカリキュラムについて、専任教員はどのように関わっているのか、「ある教員の一日」ふうに教えていただきたい。

〔千代先生〕

基盤教育企画部から 20 名の専任教員に割り当てている。スタートアップセミナーの場合、コア教員（専任 4 名＋よその学部の新任 6～7 名）＋サポート教員の 10 名くらいで担当する。授業方法は 1 か所から全学の学生に伝えるブロードキャスティング型で実施する。週 4 回で 1 学年全部にいきわたるように、4 名の教員が 1 つずつガイダンスの説明、クラス（1 クラス 25 名）のサポート、メンタリングを実施する。この結果、1 週間に一人当たり 5 から 6 時間は使う。成績は LMS で採点。出していない人に催促やチェックを実施する。

基盤教育院の教員は研究室がないため、教育へ時間をあてられる。

—基盤力テストは授業成績とは関係あるか？

〔千代先生〕

関係ない。授業アンケートと同じ。ただ、学生は熱心に取り組んでくれている。

—「みずから学ぶ」について。教員 3 名で 1200 人をメンタリングするのは負荷がかかりすぎではないか？

〔千代先生〕

問題なければ連絡なしで安心できる。問題のある場合、フラグがたつので把握し、メールを送る。文言もある程度定型化してある。そのなかで、個別に指導しなければならぬことに時間をかける必要はある。

—導入科目や基幹科目以外の共通科目や教養科目も授業を規格化しているのか？

〔千代先生〕

アクティブラーニングを入れるなどはしているが、基本的には行わない。そのかわり教養科目数自体を減らしている。

—教育の規格化に対する、他部局の教員の反応はどうか。

〔千代先生〕

「円満に対応してくれる」、「やれるところだけやる」、「やらない」の 3 パターンあり。



—基盤力テストの問題はどのように作成するのか？テストの知識の要否は学部  
部の判断か？

〔千代先生〕

基盤の担当教員が作成し、学部でもチェックしてもらおう。100問ほど作成して30問から40問を出題する。難易度チェックや入れ替えも適宜行っている。たとえば、物理が専門科目に必要なでない学生に対しても入門書や啓蒙書レベルの教科書を案内したり、日常生活での物理現象を紹介するなど個別にアドバイスすることはできる。

—思考力を確認するには？

〔千代先生〕

数学や物理なども、計算ではなくて概念や理解が中心の出題をしている。

—学生のメンタリングについて詳細に教えてほしい。「連絡がなければ問題なし」ということだが、本当に取り組んでいるのだろうか。毎週、進捗状況を報告させているということだが？

〔千代先生〕

学生が自分で決めたことなので、できなかったことはうしろめたいようで、取り組んでいる。大事なのは、(とがめないで)「言い訳」をつくってやること。「あしたからすればいいよ」「できなかったならしかたない」というように。

—各学部学科で、このパッケージの教養科目をとりなさい、という必修はあるか？

〔千代先生〕

導入科目と基幹科目は必修。学部の導入セミナーは推奨。完全に必修化のものは必修。(教養科目は) 推奨はかかっているけど必修ではない。

—問題は他大学でも活用しているのか？

〔千代先生〕

同じ問題を他大学でも導入できる。

—英語のコマ数を半減したということだが、どのようにして？

〔千代先生〕

1つの授業のなかで半分を対面、半分をEラーニングにして、自分で勉強する時間を学生に与えたということ。

—外国語教育について教えてほしい。英語のPBLと初修外国語について。  
「やめるべきものはやめる」とは？

〔千代先生〕

英語のPBLはネイティブの教員がいろいろ考える。プレゼン、商品開発などさまざま。初修外国語は、言語によっては特定の学部しか参加しないこともあるので専門科目へ移したのものもある。しかし、言語と文化をセットにし、国際理解の科目として教養科目のなかに再構築することもある。

## 講師への追加質問とそれに対する回答

—基幹科目と教養科目で内容をどのように区別しておられるのか教えてください。また、それぞれの実施体制（担当教員の配置等）についてもお聞かせください。

〔千代先生〕

基幹科目は現代的な応用と学際における学びを目的に、4単位必修として平成24年度に設定されました。

当初はご指摘のように教養科目との区別が曖昧であり、5年かけて、アクティブラーニングを必ず取り入れること、原則として定員を50名以下とすること、教養科目内の「山形に学ぶ」「応用と学際」分野から基幹科目に相応しい講義を基幹科目に移行すること、を実施し平成29年度から現在の形になりました。教養科目「山形に学ぶ」は廃止しフィールドワークを前提とした基幹科目「山形から考える」とし、「応用と学際」は招聘講師や試行的な授業など、基幹科目にそぐわない授業だけを最小限に開講するとなっています。令和5年度からの「現代を生きる」を加え、おおむね完成形になったと考えています。

実施体制ですが、教養科目は「文化と社会」「自然と科学」（および「応用と学際」）ごとに、各学部提供コマ数を割り当てています。この3つの分野については学部の年度ごとの都合もありますので、各学部で依頼する合計の提供コマ数は固定し、分野ごとの提供コマ数はある程度自由を許容しています。また、テーマについても、日本国憲法など資格関連に関わってくる講義以外は、担当教員の自由を尊重しています。このため、分野や授業テーマについて多少の偏りが生じることもあり、事務的に調整をしています。

基幹科目については、学部ごとに提供コマ数の割り振りをしてはいますが、そのうち8-9割程度については担当能力の高い教員を基幹科目部門長から指名し、教員と授業テーマが経年で維持されるようにしていました。

現在ではそこまで厳密に指名していませんが、慣性がついてそのような選出になっています。残りの1-2割は学部で担当者を決めています。厳密に教員個人を指名すると転出・退職で後継者の選出が難しく、また新陳代謝という観点からこのような少し緩い体制となっています。

—特に教養科目の「文化と社会」領域は、科目名だけでも内容に見当がつくものと、つかないものの差が大きいようですが、具体的にどのように「必要最小限」を特定し、それらを教員間で共有しておられるのか、教えていただきたいです。

学士課程基盤教育機構および小白川3学部の教員は、導入科目「スタートアップセミナー」の担当をおおむね義務化しました（担当が一順した現在は主に新任教員を学部で選出し担当）ので、文献調査（図書館利用法を含む）、グループワーク、プレゼンテーション、レポート作成について、学生がどのようなスキルをどのように習得しているかはある程度理解しています。教養科目において、これらのスキルの上にもどのようなテーマを載せて講義を実施するかは、1テーマ1開講の多い教養科目の性質上、個々の教員に任せています。このため、教育手法や必要最小限の部分の共有は、FDなどのみとなっています。

—現実的に新制度を導入した際の移行期の学生ケアをどのようになさっておられるのかについてお聞かせください。特に、成績評価についてと、不可の学生に対する対処が知りたいです。

山形大学はタコ足大学という事情があり、各キャンパスへ移行する2年生への進級条件が厳しくなっています。このため進級条件に大きな影響がある必修科目を中心に、1年生のうちにも履修科目を受講できる体制を整備しています（後期授業不可の学生には、授業期間終了後に履修授業を集中講義で開講している）。またそのような科目を含め、履修が必要となっている過年度生が在籍している場合は、新制度移行後も授業名の読み替えや開講の維持で対応しています。

学生の履修動向や出席・課題提出状況は、本部の教育部が把握しているデータのほか、授業開始3週目頃に授業担当教員に、学生の授業参加状況・態度や名簿つき合わせ（主に履修登録忘れや全欠席）などで気になる学生に関する状況調査を行っており、これらを総合して学生管理を行なっています。

特に、新制度移行期や現在のようなコロナ禍では、学生の生活や履修動向、学習志向が読みにくいところもあり、問題を抱えている学生を相談につなげ、早期に対応する必要性を感じています。

—教育の規格化と標準化として「同じ授業は全く同じ内容・同じ課題・同じ評価基準」としておられますが、こちらは、統括教育ディレクター会議で決定されたのでしょうか？どのくらい時間をかけて決定されたのか教えてください。また、実際に決定が現場に降りてきた際に、どのように規格化と標準化が計画・実行されたのか教えてください。

教育の規格化と標準化は、その授業の担当者のワーキンググループ、部門単位で自律的に決定し、その強度も分野の性質にあわせて決めています。統括教育ディレクター会議で改訂されている「基盤共通教育の基本方針」への明記について

は一部の反対意見もあり記載しておりませんが、「同一授業・同一内容・同一基準」については、どのレベルまで実施するかは別として、統括教育ディレクターだけでなく現場の教員にも理解が浸透しています。特にカリキュラムチェックリスト等による質保証の実質化や、教員リソース減少による教育の効率化という昨今の流れもあり、山形大学での必要性ははっきりしています。

規格化と共通化は、多くの場合、分野ごとで構成している FD やワーキンググループ内での情報共有から始まり、授業手法の共有や難易度の平準化、を經由して、テキストの共通化や課題・シラバスの共有という 5-10 年単位での取り組みによる収束になっています。そのような授業群では、授業資料や課題の共通化による授業準備の効率化、新規担当教員の FD、授業の代講（教員業務などでの休講の減少）、などが可能となり教員負担が減少します。また、その上のレベルでの教育改革では、規格化と標準化されたカリキュラムをもとに教育内容の相互チェックや他の授業（群）との順序依存関係の整理を実施しています。

具体的な例として、基盤共通教育の基礎となる導入科目や学部専門科目の基礎となるサイエンススキルは早期から規格化や標準下の必要性が認識されていました。これらは担当教員のワーキンググループで方向性を決定しています。スタートアップセミナーや情報処理は当初テキストの共通化から始まり、現在では最も厳しい規格化と標準化がなされています。サイエンススキルは平成 23 年度以前から教科書の共通化ののち、それまでの自由に学生が開講授業を選べるようにしていたものを授業ごとに学科指定制として、それにより学科単位での規格化と標準化を達成しています。

英語は、習熟度別授業とそれらの間の評価基準の平準化が期待される中、担当教員が非常勤教員も含め多数にわたるという困難があり、平成 23 年度以前から、評価基準の検討が継続的になされてきました。TOEIC スコアを成績評価の 20%に編入することから始め、学生から見て前期後期各週 2 コマの授業の担当教員ができる限り異なるようにするなど、内部的に教員ごとおよび学生から見た場合の評価基準の平準化への努力を実施してきました。最終的に令和 5 年度の教育改革で授業課題共通化や e ラーニングの導入などで収束していくことを目標としています。

一導入科目「みずから学ぶ」について、TOEIC スコアアップを自主課題として設定する学生が多いとのお話でしたが、それ以外の自主課題にはどのようなものがあるのでしょうか。また、その自主課題の難易度については、どのように成績に反映されているのでしょうか。

今年度の学生は主に以下のような内容で、学習時間を設定しています。

語学系資格試験：英検、TOEIC、IELTS、独検・仏検

その他資格試験：日商簿記、IT パスポート、応用情報技術者試験、タイピング技能検定、漢字検定、危険物取扱者

専門科目の先取り学習：医学部医学科、工学部の学生が多い

日常の学習習慣と、みずからの学びを省察できるよう記録する習慣をつけることが目的なので、自主課題については、その難易度は問いません。プレ・ポストで模擬テスト(もしくは本番のテスト)を受験してもらい、その増分を参考とし、最初に設定した学習時間をどの程度到達しているか成績基準をもとに学生自身に説明・評価してもらい、それを担当教員が確認して修正し、最終評価とします。先取り学習の場合は学習時間と参考書等のページ数の到達目標を学生に設定してもらいます。教員は毎週学生の自己管理シートの提出内容を確認し、必要があればメンタリングを行います。

評価上の問題としては、当初危惧していた、あまり学習していないのに自己評価の得点 100 点などの異常に高い点数をつける学生はおらず、むしろ平均以上に学習できている学生が 60 点未満をつけることが例年それなりにあるという点です。自己評価について極めて厳しく考えているか、自己肯定感が低いのかもれません。

# 直接評価による 卒業時の質保証

～基盤力テストの到達点と今後の展望～

山形大学 学士課程基盤教育機構

せんよ かつみ  
千代 勝実

山形大学の教育改革に関連した資料は以下のWebページにあります。

山形大学OIRE

<https://ir.yamagata-u.ac.jp>



- 山形大学基盤共通教育教育の実施体制(概略)
- 令和5年度の基盤共通教育について  
—令和4年度以前と比較しながら—
- 山形大学の教育評価検証  
—基盤力テストによる直接評価と検証改善—

2022年10月28日 千代 勝実 @ 富山大学第3回教養教育院FD研修会



## 山形大学基盤共通教育の 実施体制



# 山形大学ファクトシート

- 山形県内4ヶ所で6学部、学生1700人(1学年)  
人文社会科学部・地域教育文化学部・理学部・基盤教育機構(山形市)  
医学部(山形市)  
工学部(米沢市)  
農学部(鶴岡市)  
学生の出身地(高校):山形県3割、宮城県3割、他東北2割、関東1割など
  - 1年生は山形市(小白川キャンパス)で基盤教育を履修
- 東北北海道で3番目に大きな国立大学
- 教員780名、有機EL、ナスカ、スピン物理など
- 全体的に東北日本海側気候、山形市は盆地気候
  - キャンパス間は1時間半~2時間半の距離
- 県内に大学が少ない(8つ)ため、大学・学生の交流が少ない(私見)

## 基盤共通教育カリキュラムの基本的な考え方

- アラカルト(~2011) → 定食(~2018) → コース料理(現在)
  - 教員が自分の考えで教育を実施し、学生は自分の考えで授業を選択する(一つの授業で完結)  
↓
  - 山形大学として学んでほしいことをパッケージとして提供する(バランス定食)  
↓
  - 授業の順序性や依存性を意識した、カリキュラムでの教育効果最大化(一品は一味抑えたコース料理)
- 評価検証をもとに教育を実施
  - 教員がよいと思う教育をするのではなく、評価検証して、よいことを実施し、よくないことを改善する

## 第3期でのねらい（標準化と直接評価）

- 教育の規格化と標準化
  - 同じ授業は全く同じ内容・同じ課題・同じ評価基準
  - 学生は学んだ内容を他の授業で利用
    - 資料調査・ディスカッション・プレゼン・レポート・パソコン
  - 到達度評価と教育改善が容易
- 教育評価の直接指標化・客観指標化
  - 学生アンケートの利用は難しい
  - 種類多い・精度低いと特異値が必ず発生
  - 直接評価による暦年・経年の到達度評価
  - 「なんとなく良さそう」を排除

## 第4期でのねらい（自律的な学びと評価検証）

- 自律的で協働的な学びの力の育成
  - 課題発見・解決の際に必要な、自分で学ぶべきことを発見し、学び続けるメタ学習力の涵養
    - 専門での学びと異なる器用仕事の学び
  - さまざまな専門を持つ人たちと課題発見・解決していくための協働的な学び
- 統合的な教育評価指標による評価検証
  - 入学前・在学中・卒業後を追跡調査できる統合指標による教育の質保証
  - 教育改善・改革の効果が明らかになる評価検証

## 3つの基盤力の育成—全学DPと関連した基盤力

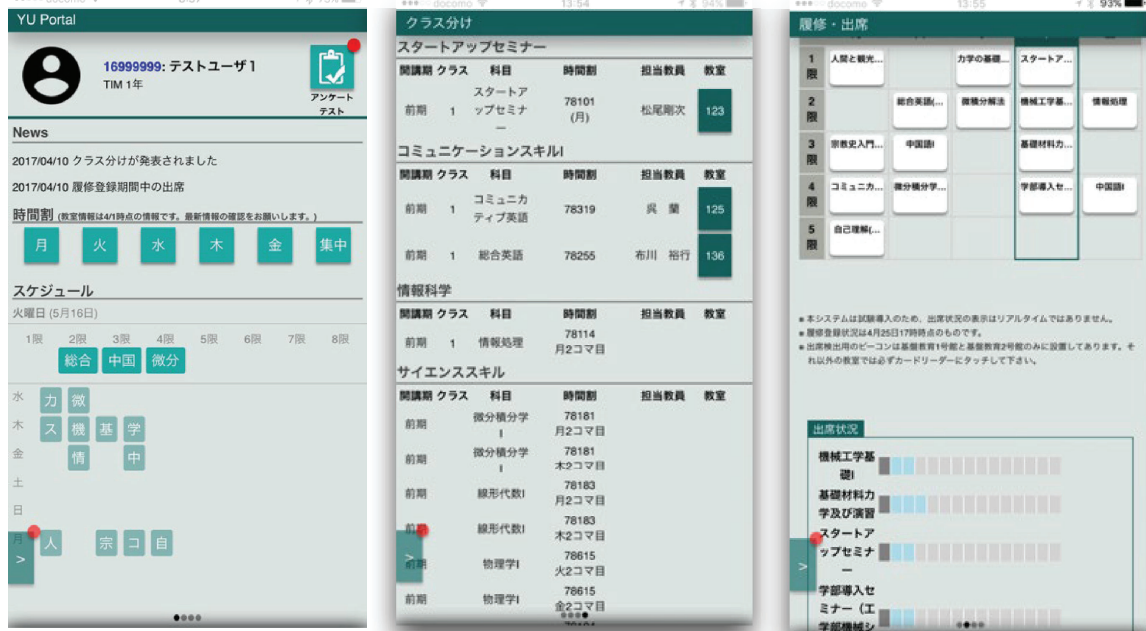
- 学問基盤力—**自律的に課題に取り組む専門力**  
専門知識の体系的習得と実践的な運用体験  
総合大学の学際**の強みを生かした応用力の獲得**
- 実践基盤力—**社会でリーダーシップを発揮する人間力**  
力強い学びを保証するキーコンピテンシーの育成  
地域課題に挑戦し生涯学び続ける自己学習力獲得
- 国際基盤力—**実践的な英語で多様性に挑戦する国際力**  
基盤としての英語力を4技能・専門別に習得  
英語PBLの実施、様々な活動を通じた国際理解

## 統括教育ディレクター会議

- 教育担当理事および教育担当副学部長・基盤共通教育実施会議議長による月2回のすりあわせ
- 全学での教育体制(基盤共通教育および専門専門教育)の実施について議論
- 議論は原則として持ち帰らず、その場で決定する
  - 事前に議論の内容は配布されるので、必要に応じて部局内ですりあわせをしておく
- 3年一貫学士課程基盤教育、基盤力テスト、教育プログラムDP/CP、キャップ制、学部共同開講など教育改革を実施する上でスピード感のある意思決定

# YUポータルアプリ

- テストやアンケートを実施するプラットフォーム
  - みずから学ぶ・出席着座確認・休講/休校情報・安否確認・通知・ポートフォリオ



2022年10月28日 千代 勝実 @ 2022年富山大学第3回教養教育院FD研修会

# YUポータルアプリ

- テストやアンケートを実施するプラットフォーム
  - みずから学ぶ・出席着座確認・休講/休校情報・安否確認・通知・ポートフォリオ



2022年10月28日 千代 勝実 @ 2022年富山大学第3回教養教育院FD研修会

# YUポータルアプリ

- テストやアンケートを実施するプラットフォーム
  - みずから学ぶ・出席着座確認・休講/休校情報・安否確認・通知・ポートフォリオ



2022年10月28日 千代 勝実 @ 2022年富山大学第3回教養教育院FD研修会

## 令和5年度の基盤共通教育について —令和4年度以前と比較しながら—

# 基盤共通教育の構成

コアカリキュラム

## 導入科目(4-)

スタートアップセミナー: 文献調査・グループワーク・プレゼン・レポート作成(2)  
 学部導入セミナー(学科・コースで必要に応じて設定)  
 みずから学ぶ: 自律学習力・生涯学習力を涵養(2) (令和5年度から)

## 基幹科目(6)

人間・共生を考える: 現代的な応用と学際(2)  
 山形から考える: 自律学習力・生涯学習力を涵養(2)  
 現代を生きる: 現代的なスチューデントスキル(2) (令和5年度から)

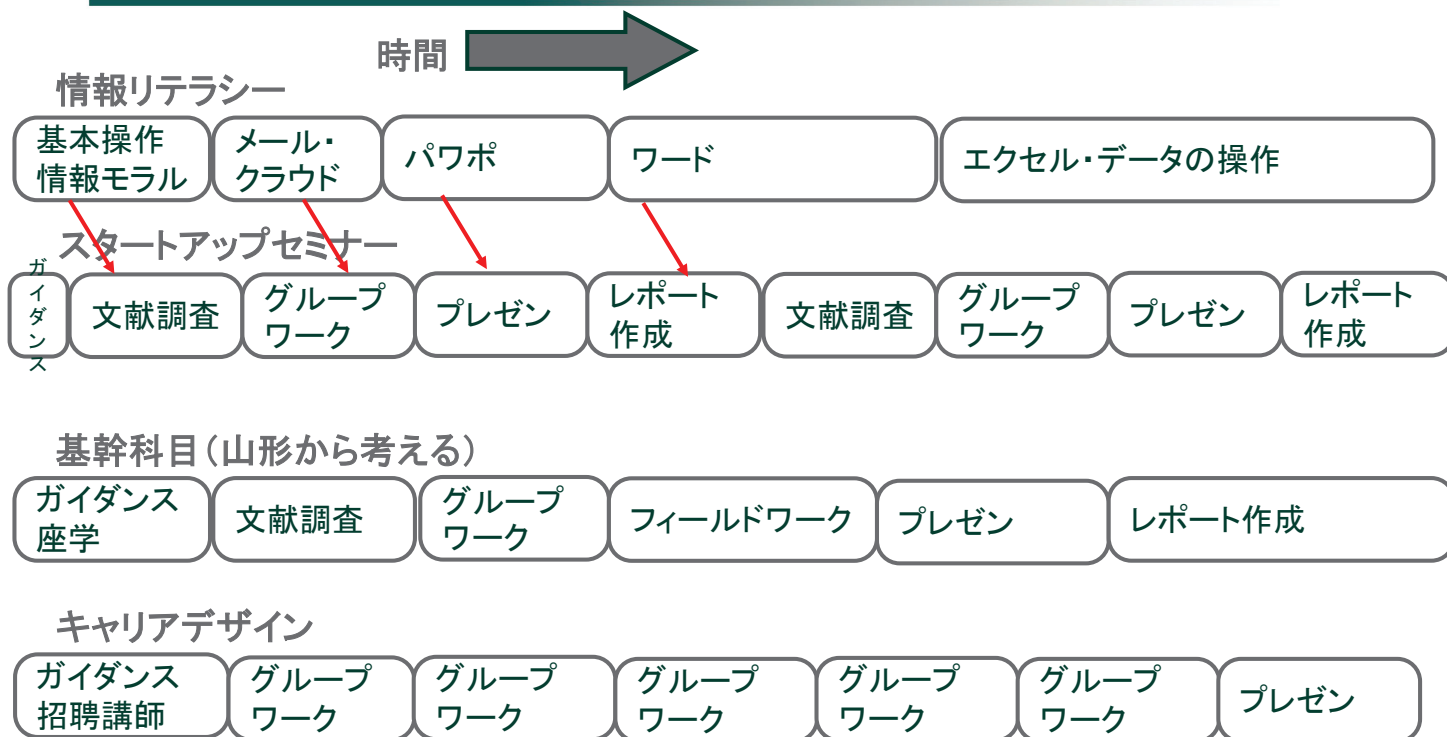
## 教養科目(6-20)

文化と社会: 人文社会科学系の教養を涵養(削減傾向)  
 自然と科学: 自然科学系の教養を涵養(削減傾向)  
 応用と学際: 基幹科目に向かない、試験的な授業(削減傾向)

## 共通科目(6-20)

コミュニケーションスキルI(英語)・コミュニケーションスキルII(初修外国語)  
 情報科学(令和5年度からデータサイエンス基礎(2)が必修化)  
 健康・スポーツ、サイエンススキル、キャリアデザイン

# 順序性・依存関係を意識したカリキュラム構成



・ 学生がわかっていることを前提にすると教育効果は上がる



# 教育の規格化（スタートアップセミナー・情報処理）

単位	テーマ	内容	評価	テーマ	情報処理
第1回	ガイダンス（授業内容と進め方について）	● 授業の目的・到達目標を共有する ● 授業の進め方（授業時間配分） ● 授業の進め方（授業時間配分） ● 授業の進め方（授業時間配分）	出席率 授業態度 授業内容の理解	ガイダンス	● 授業の目的・到達目標を共有する ● 授業の進め方（授業時間配分） ● 授業の進め方（授業時間配分） ● 授業の進め方（授業時間配分）
第2回	調べ物の基本	● 調べ物の目的・意義を共有する ● 調べ物の進め方（調べ物の進め方） ● 調べ物の進め方（調べ物の進め方） ● 調べ物の進め方（調べ物の進め方）	出席率 調べ物の進め方	調べ物の基本	● 調べ物の目的・意義を共有する ● 調べ物の進め方（調べ物の進め方） ● 調べ物の進め方（調べ物の進め方） ● 調べ物の進め方（調べ物の進め方）
第3回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（1）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第4回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（2）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第5回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（3）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第6回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（4）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第7回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（5）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第8回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（6）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第9回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（7）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第10回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（8）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第11回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（9）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第12回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（10）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第13回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（11）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
第14回	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘（12）	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方	出席率 探究学習のテーマ発掘	第1回サイタル授業発表・探究学習のテーマ発掘	● 第1回サイタル授業発表の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方 ● 探究学習のテーマ発掘の進め方
EA（第15回）	「授業発表法」	● 授業発表法の進め方 ● 授業発表法の進め方 ● 授業発表法の進め方	出席率 授業発表法の進め方	「授業発表法」	● 授業発表法の進め方 ● 授業発表法の進め方 ● 授業発表法の進め方

- スタセミは1コマ目必修
  - 学部学科ミックス25人
- 授業資料・進捗・授業日を基盤 共通教育担当全教員に配布
- LMSで学生の到達度課題管理
- FDの頻繁な実施
  - 開始当初・中間・終了後
  - 毎週
  - 適宜の打ち合わせ
- 前年度履修したTA・AAによるサポート

## 自律的で協働的な学びの力の育成(みずから学ぶ)

- 自分で目標を設定し、スケジュールを決定し、定期的に到達度の状況を見直し、最終的に目標を達成する
  - 適切な目標設定・計画力・動機付け
    - たいていの一年生は何かやろうと意気込んで入学してくるが、4月・5月と忙しさにかまけて、結局何もやらずに1年間が過ぎてしまう
- 先祖返りの教養教育？
  - もう少し時間的な余裕があった時代は、学生が好き勝手に自分の学びたいことや体験したいことに（もしくは自堕落に）取り組んでいた。
  - 大学は最小限何を教育したいか取捨選択すべき

## 自律的で協働的な学びの力の育成(みずから学ぶ)

- 最初の不純な動機(2013)「アクティブラーニングって学生の主体的な学びを涵養、って趣旨だけど、教員もしんどいよね。学生が主体的になればなるほど教員が楽になる授業って作れないかな？」
- 「学生が自分で定量的な目標を立てて自己管理して、教員がメンタリングという名前の応援をする授業は成立するかな？グルーピングして相互監視させたらどう？」
- 「自己管理だけでも8～9割の学生はしっかりやってる。積極的なグルーピングは不要。というか、達成できなかったらむちゃくちゃ悔しがるな」
- 「自己管理シート、このデータってすごすぎない？」

## 自律的で協働的な学びの力の育成(みずから学ぶ)

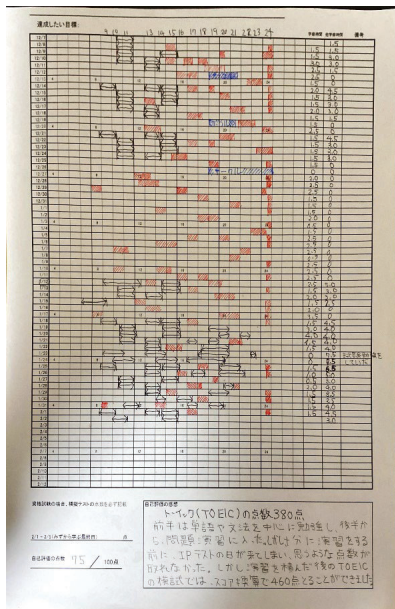
- 教員3名、履修定員前後期で、のべ1200名
  - 履修希望者は大体2倍くらい
  - 当初は対面でのメンタリング、現在はオンライン
- 令和5年度から全学必修化(前期で1700人)
- 教員の負担は少なくなっている。学生はオンラインのコミュニケーションや管理に慣れているので、大人が思うほど課題はない。うまく進んでいる学生にはメンタリング不要
- 他の教員2名も授業が成立しているか、はじめは半信半疑だったが、前期はもちろん、後期でも学生のまじめさに驚く
- この授業では、学生は定量的にどのくらい学習すればどのくらい成果が出るかを意識してメタ学習している



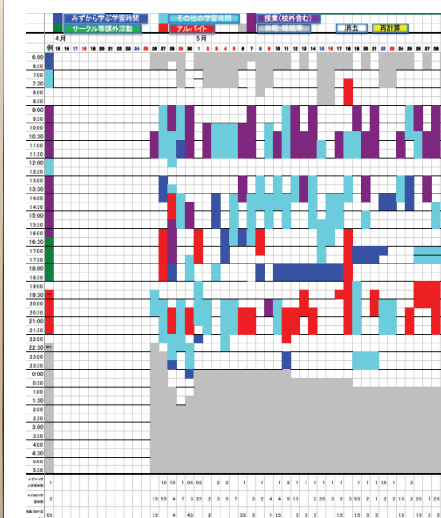
# 自律的で協働的な学びの力の育成(みずから学ぶ)

- 自分で目標を設定し、スケジュールを決定し、定期的に到達度の状況を見直し、最終的に目標を達成する
- 学生は週1回自己管理シートを提出し、教員がメンタリングを行う

2013-2020



2020-2022



# 自律的で協働的な学びの力の育成(みずから学ぶ)

学生の反応のうち、平均的なもの『みずから学ぶこそ、大学らしい授業です』

私は今回みずから学ぶを受講するにあたり、今までの自分と学習のスタイルを変えてみることにした。前期、そしてそれ以前の私は勉強をするときに、今日はここからここまでを終わらせようという風に、内容でその日の学習の指標を定めていたが、今期は「何時間やる」という風に時間で一日の学習の指標を定めるという新たな試みに挑戦してみた。その結果、時間を決めて学習した方が、計画を立てやすいということが分かった。時間を決めて取り組むと、限られた時間の中での学習のため、現実的でより綿密な計画を立てることができた。そのうえ、時間を限っているためその時間だけ集中して学習することで、だらだらと長時間かけてやるよりも効率よく学習を進めることができた。その結果、当初からの、TOEICで600点以上とるという目標を達成できた。

TOEICの結果を受けて、自分はリーディングの技能が低いということが分かったので、12月10日以降は、あらかじめ定めた勉強時間のうち、余った時間をリーディングの練習として、英字新聞を読む時間に回した。その結果、先日受けた模試では、リスニングの点数は少し下がってしまったが、リーディングの点数が飛躍的に上昇した。この授業で身につけた、「時間で計画をたてる」というやり方は、来年度以降の学習ではもちろん、社会に出た時も役に立つ。みずから学ぶの授業では、自分に合った自己管理のやり方を発見できてよかった。

## スチューデントスキル(現代を生きる)

- 専門の知は、職業や究める最先端の知
- 日常生活の課題解決には、切れ味鋭い専門の知よりも、手持ちの道具と材料をうまく使う日曜大工的な器用仕事の出番の方が多い
- 非常に難解だったり複雑だったりする諸問題を、自分で専門的な知を使って全て解決することはできない、少しでもましな選択をするためのよりよい知恵
- 大学での知は、静的な体系性や厳密性を追求する分野が多い
- 日常の知は動的で予言や予測を伴うものが多い

<https://www.ias.yamagata-u.ac.jp/content/intro/objective/>

## スチューデントスキル(現代を生きる) **令和5年度から**

- 大学教育で期待される現代的なスキル
  - 山形大学とは
  - 情報倫理
  - 避災教育
  - SDGs
  - 消費者教育
  - ダイバーシティ
  - 大学生活とキャリア
  - 人生設計論

# 授業の標準化・規格化によるコマ数の効率化

- 基盤共通教育のコマ数(≒1週間の教室稼働数)
  - 907コマ(2017年)
    - 自由に開講、学生の選択肢を増やす
  - 750-780コマ(2018-2022年)
    - 情報処理授業の外注化、少人数授業のスタセミへの統合
    - キャップ制の全学的導入
  - 650コマ(2023年予定)
    - スタセミのさらなる省力化
    - 大規模オンデマンド授業導入(みずから学ぶ・現代を生きる・データサイエンス基礎)
    - 英語コマ数の半減と教員の(ほぼ)完全外国人化

## 山形大学の教育評価検証 —基盤カテストによる直接評価と検証改善—

## 基盤カテスト：なぜ直接指標？客観指標？

- カリキュラムマップは質を保証するわけではない
  - カタログ・メニューであり自己点検の一部分
- GP/GPA/GPAは間接評価指標
  - GP/GPAは学位プログラムの修正・授業担当者の変更・インセンティブによって容易に変動する
  - その授業時での評価で「大学環境」の教育能力とは異なる、卒業時に維持されているか不明
  - 暦年・学部/学科・大学間で比較不能
- ポートフォリオは整理が難しく分析が不可能
  - ポリシーを持って収集していても雑多な集積

## 基盤カテスト：直接指標と間接指標

- 直接指標（直接評価）
  - 改善点がはっきりする指標
    - 標準テスト（作成が難しい）
    - ルーブリック（norming—評価基準の標準化が難しい）
    - ポートフォリオ（分析が難しい）
- 間接指標（間接評価）
  - 改善点がはっきりしない指標
    - 各種アンケート
    - 学生調査
    - GP/GPA
- 山形大学では間接指標も利用しつつ直接指標へ

## 基盤カテスト：授業の規格化と評価検証

- 授業の規格化・標準化と評価検証は切っても切れない関係
  - 同じ名前の授業でずれた内容や学生評価を実施していると...
    - 1つの授業で評価しても別の授業では違う結果
    - 評価の際、別に取り扱くと統計精度が落ちる
    - 授業改善をしても教員が変わると失われる
    - そもそも評価基準が変わるので、学生から不満が出る
- 同じ授業は同じ内容、教員間で共有し連続性を維持する
  - みんなで評価検証し、みんなで改善し、みんなで共有する
  - 一人のすごい改善より、みんなで平凡な改善を繰り返す
- 標準化された授業と、特別な授業の利点を活かす

## 基盤カテスト：なぜ直接指標・客観指標？

- そもそも教学データはビッグデータではない
  - 1学科コース 数十～数百人(統計的確度は低い)
  - 1サイクル4年かかるがそれ以前に経営判断
- 指標の有用性や精度が低いと説明力がない
  - 精度が低い・フォーマット不揃いでは使えない
  - 解釈の余地が大きい指標は結論を導かない
- 解析するための人的・金銭的リソースが少ない
  - 少数の単純明快・基本的な指標で分析
  - 種類多い・精度低いと特異値が必ず発生

**質が高く客観性が保証されているデータが必要**

# 基盤カテスト：なぜ標準テスト？スマホで実施？

- 標準テスト
  - 誰にでもわかりやすい
  - スケーラブルかつリモート実施可能
    - 現在、香川大学、帯広畜産大学でも基盤カテストを実施
  - 測定できる評価軸が限られている
    - ただしその評価軸については精度を高められる
- ルーブリック
  - 多数の観点で評価可能
  - 教員間で揃えるのが難しくスケーラブルではない
- GPA、ポートフォリオ：難しい、連続性がない

## 基盤カテストの目的

- **全学生の学習到達度を直接評価し、基盤教育の効果を検証すること**

山形大の学士課程教育

基盤カテスト（3年次）

4年次

基盤カテスト（2年始業時）

2～3年次  
基盤専門教育

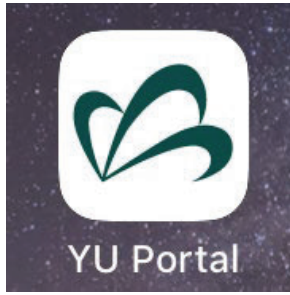
基盤カテスト（入学時）

1年次  
基盤共通教育



# テストの出題形式

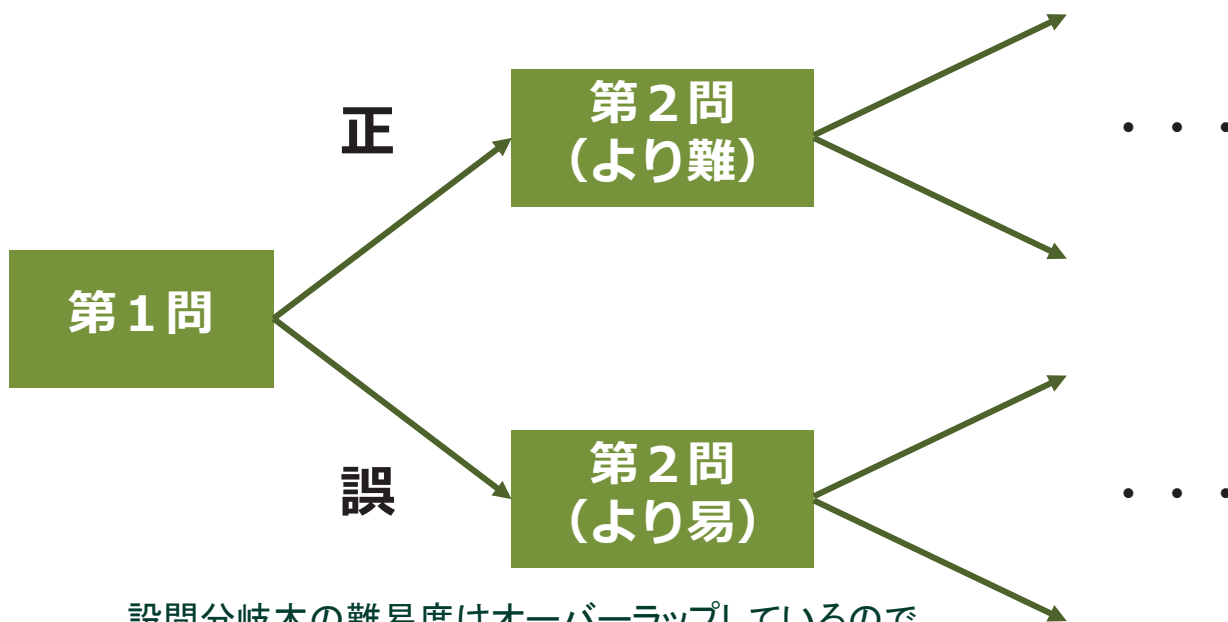
- ・ スマートフォンのアプリ「YU Portal」を使用



- ・ **コンピュータ適応型テスト**を採用
  - 項目反応理論に基づき、受験者の解答に応じて出題
- ・ 出題数：各分野**5問ずつ**
- ・ 設問毎の制限時間：**3分**
- 試験時間は**5科目で30分程度**

# コンピュータ適応型テストの概要

例】



設問分岐木の難易度はオーバーラップしているので  
1問目を間違えても解答パターンによっては難易度の高い  
問題も出題される

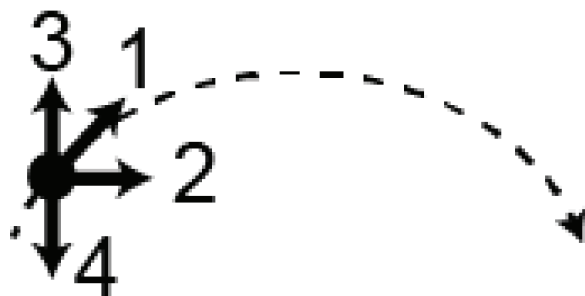
# 基盤力テスト：実施項目

- 学問基盤力テスト(入学当初、2年次4月、3年次)
  - 数的文章理解・数学・物理学・化学・生物学・語彙力
- 実践地域基盤力テスト
  - 5因子性格調査(入学当初)
  - 出欠状況・ポートフォリオ(現存)
  - フィールドワーク・インターンシップ
- 国際基盤力テスト
  - TOEIC
  - eラーニング、留学等国際関係活動実績



# 学問基盤力テスト：設問試作例（物理）

- 問. バスケットボールの選手がシュートした。破線のような軌跡をたどるとき、ボールが手を離れた少し後に下図の地点でボールに実際にはたらいっている力を選べ。



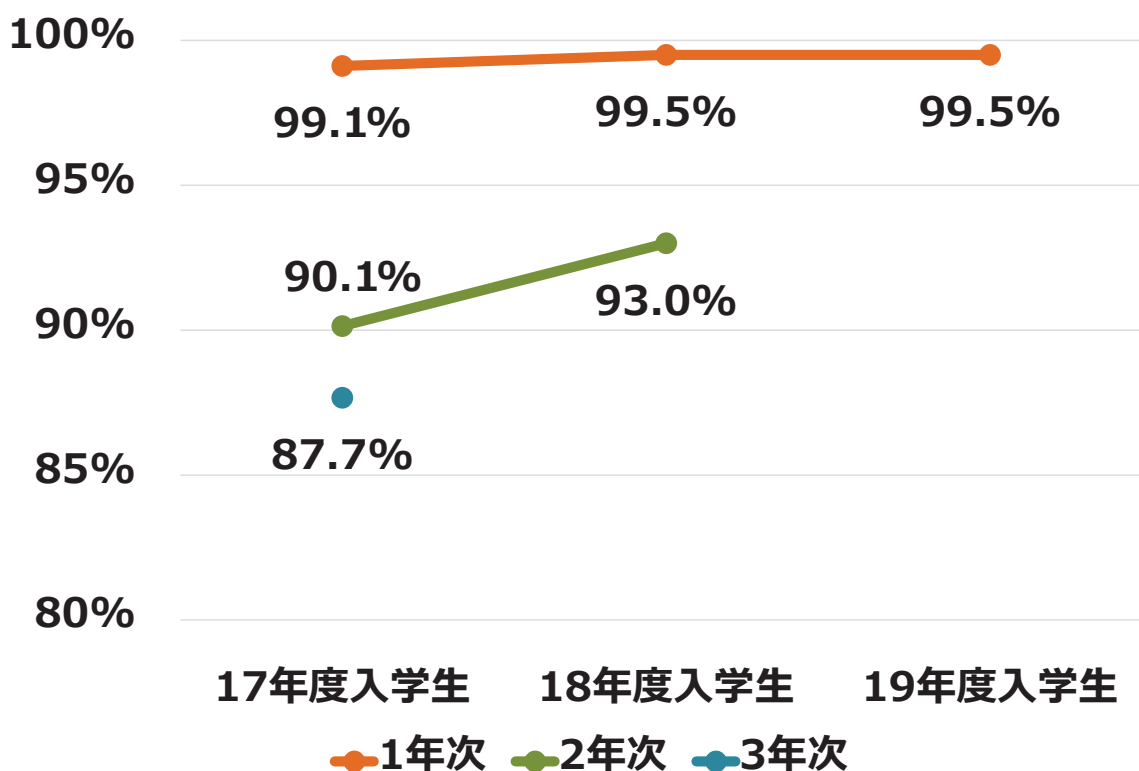


# 学問基盤力テスト：本試験受験率※

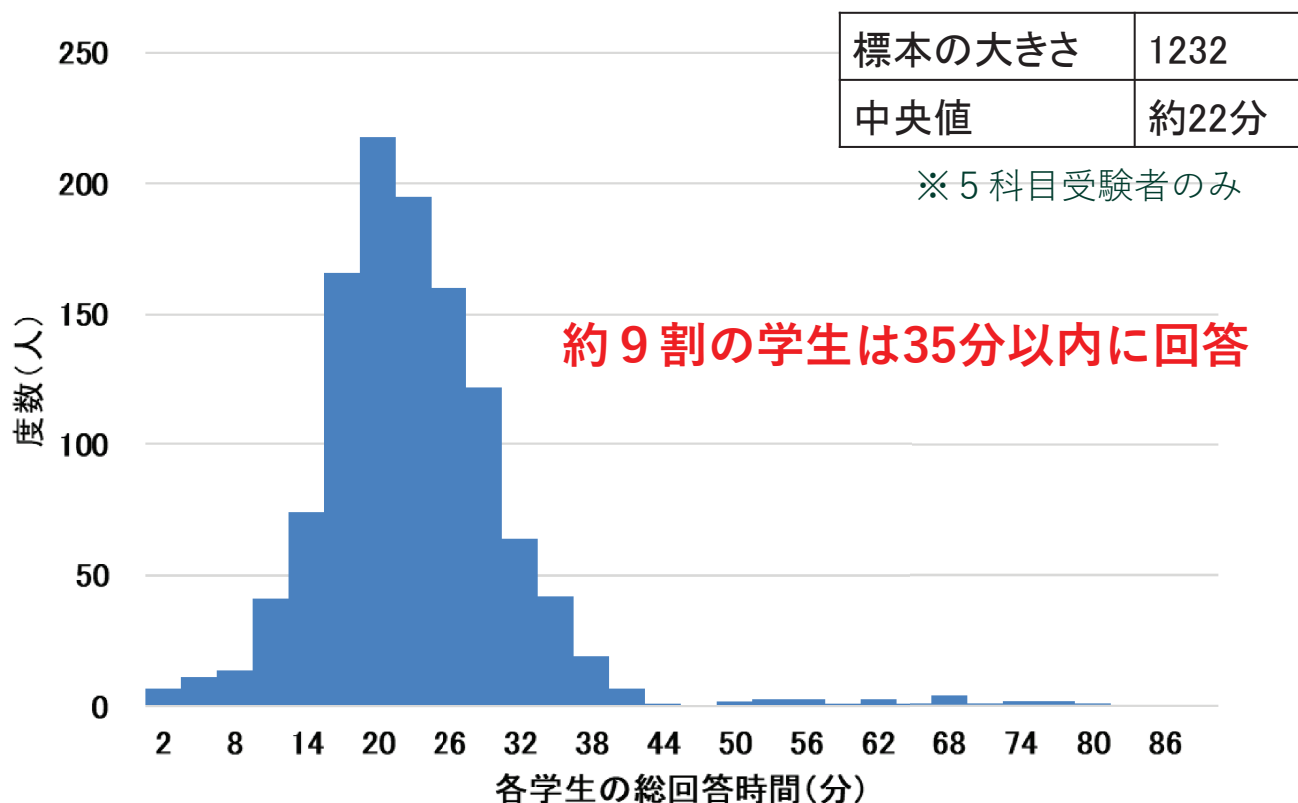
	数的文章理解	数学	物理学	化学	生物学
対象学部	全学部	理系のみ (文系は対象外)			
対象者数	1731	1242	1242	1242	1242
受験者数	1719	1230	1230	1230	1233
受験率	99.3%	99.0%	99.0%	99.0%	99.3%

※平成29年4月のオリエンテーション実施時の受験率

## 受験率（全科目平均）



# 基盤力テスト：回答時間（※）



## 17年度入学生：1年次→2年次：化学

カリキュラム	能力値 $\theta_{1年}$	能力値 $\theta_{2年}$	能力値 $\theta_{差}$	$p$	$d$
全	-0.19	0.09	0.28	0.00	0.33
A	-0.14	0.31	0.45	0.00	0.50
B	0.38	0.44	0.06	0.55	0.08
C	-0.48	-0.56	-0.09	0.39	-0.13
D	-0.22	0.50	0.72	0.00	0.81
E	-0.05	0.32	0.37	0.00	0.46
F	-0.39	-0.43	-0.04	0.54	-0.06
G	-0.16	0.18	0.34	0.00	0.40
H	-0.36	-0.11	0.26	0.43	0.33
I	-0.45	0.16	0.62	0.00	0.72
J	-0.45	-0.37	0.08	0.22	0.13

✓ 16年度1年生  
12月時点の  
 $\theta$ 平均 = 0  
 $\theta$ 標準偏差 = 1

✓  $p < 0.05$  で有意

効果量 $d$	増	減
小		
中		
大		

## 学問基盤力テスト：新しい知見・改善例

- どの学部も入学年度によって入学時の成績が異なる
- 当初成績がよくても、授業がないと成績は必ず低下する
  - 学びが定着していないのでは？
- 対面とオンデマンドで教育効果が違う授業と同じ授業がある
- 農学部
  - 化学の成績が振るわないことが課題だった
  - 基盤力テストでも化学の成績が期待より低かった
  - サイエンススキルに農学部向けの化学の授業を2コマ導入（推奨科目としてほぼ全員が履修）
    - 基盤力テストで化学の成績が有意に上昇

## 実践基盤力テスト：開発の概要

- 「キー・コンピテンシー\*」とよばれる  
習慣や態度に対応する能力に関する指標を測定  
したい
  - しかし、そのようなテストは確立されていない
- 山形大学では「キー・コンピテンシー」を  
そのまま測定するのではなく、  
その基礎となる習慣や態度を測定する  
「5因子性格調査」を実施

# 5 因子性格調査とは？

設問数	70問(「はい」「いいえ」で回答)
実施時期(4月)	
新入生	入学ガイダンスの時
2年生	2年生ガイダンスの時
回答に要する時間	5分程度(想定)

## 5因子

- E: 外向性
- A: 協調性
- C: 良識性
- N: 情緒安定性
- O: 知的好奇心



必要な時に必要な行動特性を示す  
「適応能力」を高めることに利用

(向き不向きといった直接的な評価や  
個人の性格診断は行わない)

# 5因子スコアの比較

## 入学生のスコア比較: 2017~2019年度入学生

5因子	2017年度入学生*		2018年度入学生**		2019年度入学生***	
	Mean	Std. Dev.	Mean	Std. Dev.	Mean	Std. Dev.
E: 外向性	46.0	10.5	46.0	10.1	46.2	10.5
A: 協調性	52.0	8.7	52.4	9.0	52.9	8.8
C: 良識性	54.5	9.5	54.3	9.7	54.7	9.8
N: 情緒安定性	47.6	9.7	48.4	9.3	48.3	9.5
O: 知的好奇心	49.4	9.7	49.8	9.8	49.5	9.9

\* 条件を満たす2017年度入学生 (N = 1,691)

\*\* 条件を満たす2018年度入学生 (N = 1,721)

\*\*\*条件を満たす2019年度入学生 (N = 1,715)

# 分析方針

## ■ 基本的な問い

- ・ 各5因子スコアと学業成績の間に関連性はあるのか？

## ■ 分析に使用する学業成績データ

- ・ 2018年度前期における**スタートアップセミナー**（2単位）の**出席状況**と**成績**
- ・ 2018年度前期におけるGPAは、9/13時点で入力が完了していなかったため、利用不可能

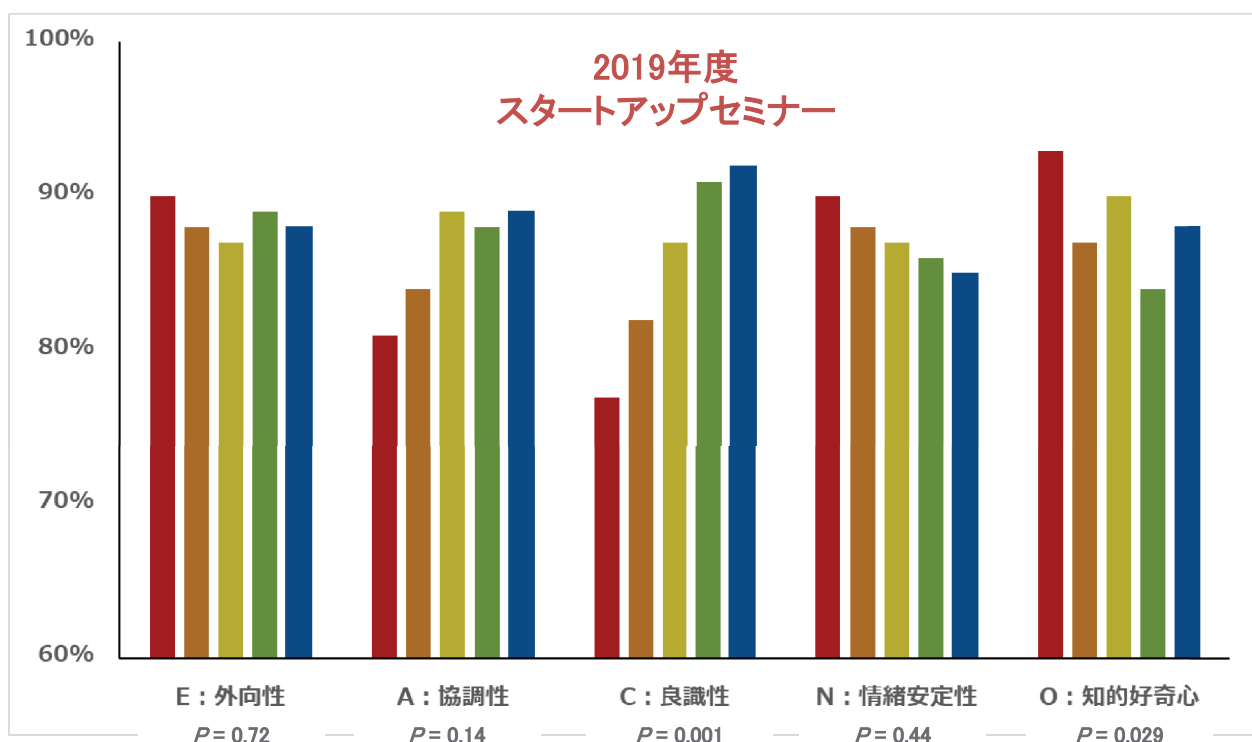
## ■ 今回の分析

1. 各5因子 vs. スタートアップセミナーの**成績**
2. 各5因子 vs. スタートアップセミナーの**出席状況**

# 5因子スコア vs. 2019年度クラスの成績

成績が80点(100点満点)以上の  
学生の比率

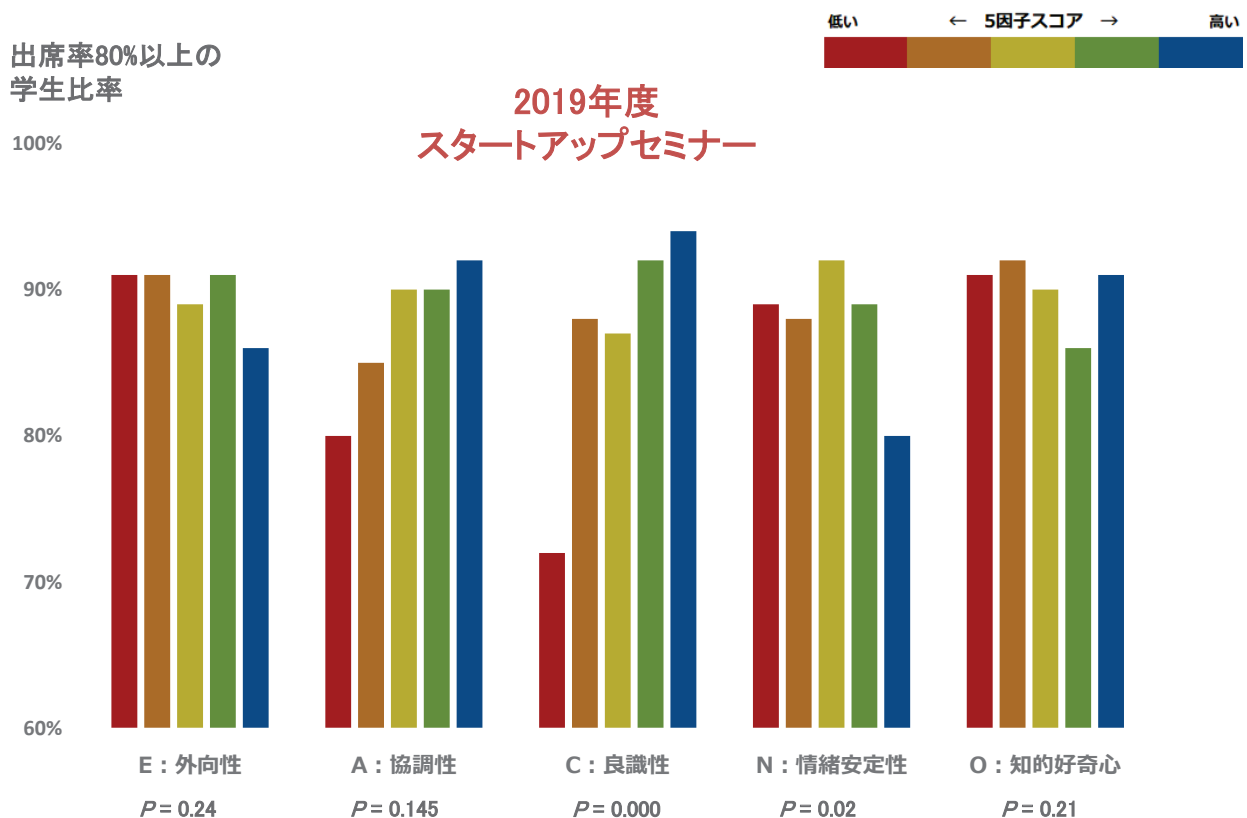
低い ← 5因子スコア → 高い



# まとめ：5因子 vs. スタートアップセミナーの成績

成績との関連性が見られた因子	読み取れた傾向		
	2019年度クラス	2018年度クラス	2017年度クラス
A: 協調性			N/A
C: 良識性		良識性のスコアが高いグループほど、成績良好者の占める割合が <b>大きくなる</b>	
N: 情緒安定性			情緒安定性のスコアが高いグループほど、成績良好者の占める割合が <b>小さくなる</b>
O: 知的好奇心		知的好奇心のスコアが高いグループほど、成績良好者の占める割合が <b>小さくなる</b>	

# 5因子スコア vs. 2018年度クラスの出席状況



## まとめ：5因子 vs. スタートアップセミナーの出席状況

出席との関連性が見られた因子	読み取れた傾向		
	2019年度クラス	2018年度クラス	2017年度クラス
C: 良識性		良識性のスコアが高いグループと低いグループ間では、出席良好者の占める割合が明らかに異なる	
O: 知的好奇心		知的好奇心のスコアが高いグループほど、出席良好者の占める割合が <small>小さくなる</small>	

## 分析結果のまとめ&今後の展望

### ■ スタートアップセミナーの成績および出席状況と関連性があるかもしれない因子

	2019年度クラス	2018年度クラス	2017年度クラス
成績		C: 良識性 ↑ O: 知的好奇心 ↓	A: 協調性? C: 良識性 ↑ N: 情緒安定性 ↓
出席		C: 良識性 ↑ O: 知的好奇心 ↓	C: 良識性 ↑

### ■ 今後の展望

- 山形大学版 **Early-Alert (Early-Warning) Systemsの確立**
  - ・ 学生への介入プログラムを効果的に実施
  - ・ 必要な時に必要な行動特性を示す「適応」を指導

# まとめと展望

---



## まとめ

---

- 教育の質保証～標準化と基盤力テストによる評価検証
  - 教育内容を担当教員の自主的な考えに任せるのではなく、入り口・出口を意識して、教育プログラム・カリキュラム全体でシナジーが生じるように最適化しなくてはならない
  - 教員の自主性に任せる＝教員によって教育内容に当たり外れがある からの脱却
- 自律的な学修者の育成
  - 何周か回って、みずから学ぶ人間の育成に戻った
  - まず「あえて何を教えないか」を決める必要性



## 展望：入り口から出口・その先の質保証

---

- 教育プログラム・カリキュラムの入り口・途中・出口とその後の追跡調査による教育効果の評価
  - 授業単体、学年修了時の主観的なアンケート調査から、客観的な改善につながる質保証へ
- 高等教育で何を教育し、何を自分で学び、何を止めるか
  - いろいろな人の、あれも教えるべき、これも教えるべき、に客観的なエビデンスはない
  - 人生と大学4年間の時間は有限
  - 大学はまず、最小限何を教育したいかミニマルを定義した上で取捨選択すべき

# 教養教育院FD 実施計画

テーマ「教養教育の更なる充実を目指して 教養教育院FD2022 vol. 3」

## 1. 開催趣旨

今日、社会からは、長引く新型コロナウイルス感染症や景気低迷、深刻度を増す環境保全対策等に対応した人材育成が求められています。自ら考え、未知の課題に対応できる能力、多様な属性や考えの人々と協調して物事を進めていける能力を身につけさせることなどが求められています。

このことを踏まえ教養教育院では、令和8年度を新たな教養教育の改革年と位置づけ、学生に身に付けさせるべき能力を確認した上で、新たな教育内容、実施方法等について取りまとめていく計画です。

今回のFDは、本学教養教育の更なる充実に向け、改革を実施した大学の先行事例を学び、参考とすることを目的に実施します。

## 2. 開催日時

令和4年10月28日（金）15：00～16：20

## 3. 開催会場

Microsoft Teams 会議によるオンライン配信

## 4. 対 象

本学教職員，非常勤講師

## 5. 次 第

### (1) 開会挨拶・趣旨説明（2分）

彦坂 泰正（教養教育院教育改善推進委員会委員長）

### (2) 「直接評価による卒業時の質保証～基盤力テストの到達点と今後の展望～」(45分)

講師：千代 <sup>せんよ</sup> 勝実 <sup>かつみ</sup> 氏（山形大学学士課程基盤教育機構 基盤共通教育実施会議議長）

### (3) 質疑応答（30分）

### (4) 閉会挨拶（3分）

武山 良三（教養教育院長）

令和4年度第3回教養教育院FD  
「教養教育の更なる充実を目指して 教養教育院FD2022 vol.3」参加状況

**【当日参加者内訳】**

教員	
役員	1
芸術文化学系	4
教養教育学系	15
理学系	1
都市デザイン学系	2
医学系	3
教育研究推進系	3
小計	29

職員	3
----	---

合計	32
----	----

**【オンデマンド参加者内訳】**

教員	
芸術文化学系	1
教養教育学系	1
理学系	1
都市デザイン学系	3
工学系	1
医学系	4
薬学・和漢系	2
教育研究推進系	4
小計	17

合計	17
----	----

総計	49
----	----

# 令和4年度第3回教養教育院FD参加者アンケート集計結果

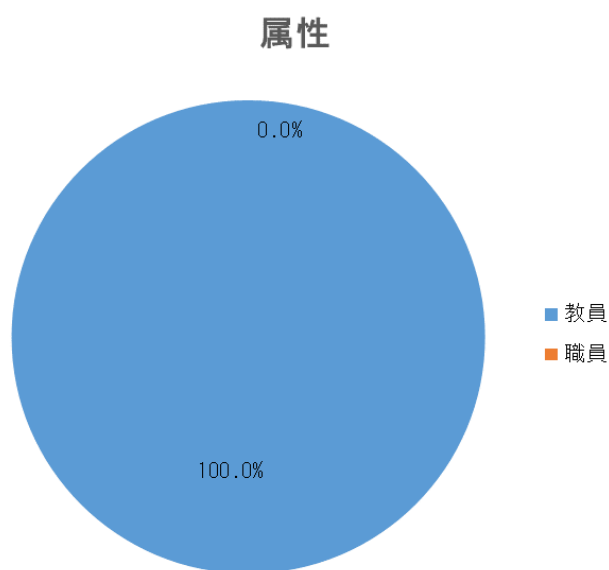
(2023/1/4 時点)

FD参加者数：49名

(内訳：教員46名、職員3名)

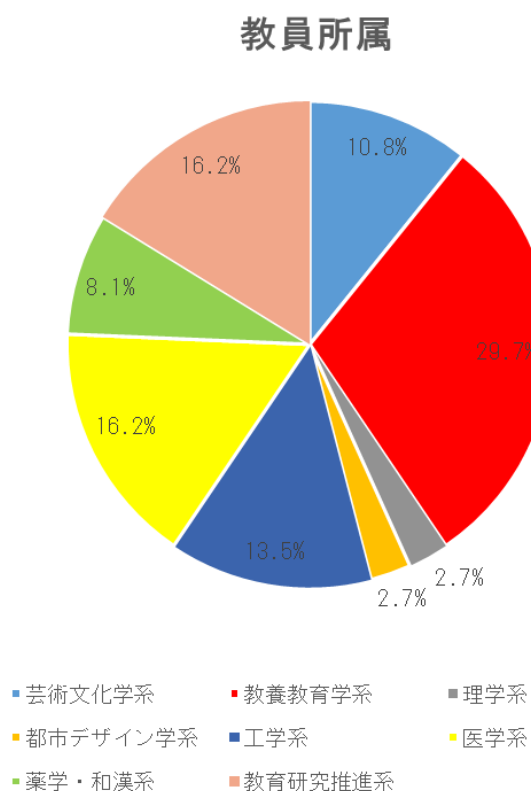
アンケート回答者数：37

## 1. 属性を選んでください



属性	人数
教員	37
職員	0
計	37

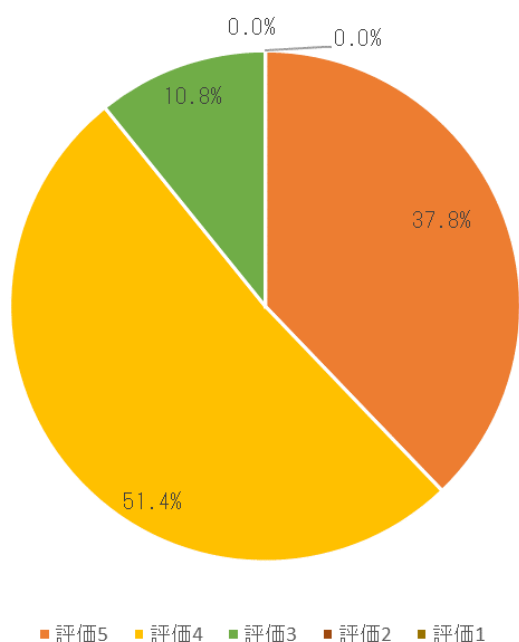
## 2. 所属を選んでください (教員のみ)



教員所属	人数
芸術文化学系	4
教養教育学系	11
理学系	1
都市デザイン学系	1
工学系	5
医学系	6
薬学・和漢系	3
教育研究推進系	6
計	37

3. 今回の教養教育院FDに参加しての評価を5段階評価で入力ください。

今回のFDに参加しての評価



今回のFDに参加しての評価	
評価5	14
評価4	19
評価3	4
評価2	0
評価1	0
計	37

4. 今回の教養教育院FDについての感想やご意見があれば、ご記入ください。

- ・ 自分で目標を設定するというのは面白いと思いました。
- ・ 共通教育カリキュラムや成績評価についてユニークな取り組み事例をご紹介いただき、参考になりました。
- ・ 非常に規模が大きく緻密な教養教育のシステムを構築している地方国立大の先進事例を知ることができ、ためになった。
- ・ 導入教育や、直接評価など特色ある取り組みについて知ることができ、また、質疑応答をとおして現場での具体的な遣り繰りの様子も伺うことができ、大変有意義でした。
- ・ 全体的にとっても興味深い内容でした。基盤力テストに関しては、このような考え方があるのかと驚いたのですが、実際には、これを作成する側も、受験しなくてはいけない学生さんもかなりつらいのではないかと感じました。1年生時においてならまだ良いと思いますが、3年時までというのはかなりつらいのではないかと感じました。大学で学ぶべき内容がどこまでなのかというのは、難しい問題だと思うのですが、大学において、自身の将来の夢がかなり明確になってきているところで、自分の将来の夢に直結しないために、その時点では時間を注げないような科目についてまで、テストを受けなければいけないのは、医学科の学生の例のように、その意味を見出せないのではと思いました。(しかしながら、このようなさまざまな改革をなさっているという点には、多大な敬意を表します。)
- ・ 先進的な取り組みの紹介で大変参考になった

・データが示され、具体的で非常に明快だった。教えるべきものをいかに選択する（絞るか）は大事な視点だと思った。

・他大学の事例をいくつも聞くにつけ、立案・実施・評価などのいずれの段階を進めるにしても人的資源が不足していると感じ、無力感を覚える。誰かが頑張ったとしてもそれを評価してその人の待遇を改善することもできない。「できたらすばらしいけどうちでは無理だよ」ね」としか感じない。

・授業の進め方の改善につなげてゆきたいと思います。

・スタートアップセミナーで、文献→メール→パワポ→ワードを2回繰り返すこと等が参考になりました。

・教員間の情報共有によって標準化が達成されるように感じました。

・各授業に教育目標を設定したほうが良いのかも知れませんが、「この授業では学生が○○ができるように教育して下さい」ということですが、できるだけ具体的な目標が設定されていると、教員側も準備しやすいと思います。

・大学としてのシステムづくりと、教員の積極的参加が必要だと感じました。

・自由な大学から、標準化・規格化への移行であるが、世界が求める人材は多様性や個性に重きが置かれている点で、まだ発展途上の取り組みであるように思われた。

・強い衝撃を受けました。自身の教育（教養も専門も）について深く振り返る機会を得ました。

・やはり今なされている、学生の授業評価アンケートにあまり振り回される必要が無いということで納得できた。

・スタートアップセミナー（文献調査、グループワーク、プレゼン、レポート作成）の全学的取り組みは、本学でも早期に取り入れて欲しい。”

・オンデマンド、オンラインによる教育は、積極性のある学生に対しては有効なように思えますが、真逆な学生は視聴率が悪いが、ラジオ化している。また、身についたように錯覚する学生が多く、確認のためのテストを行うとできない学生が多いように感じる。

最近、何かを改善するため（もしくは改善のために状況を把握するため）の様々な負荷が、学生にも教員にも増えてきていると感じる。何かに取り組むには、他の何かを捨て、負荷をスリム化することも重要。

・学生側の受け取りを考えながらパッケージ化した授業が学生、教員両者の最適化・効率化になるとい点は非常に魅力的だった。

・方向性は大変参考になりましたが、基盤力テストを実際に導入する段階ではテスト理論の専門家の先生の全面的な協力が必要になり、一筋縄ではいかないのではと危惧しています。また実施の上でも、学生の不正行為による結果へのバイアスをどう排除するか、試験問題の非公開性をどう担保するか（IRTに基づく試験では必須なはず）など、仮に本学で導入するには解決すべき問題が多々あるのではという感触を持ちました。

・大変興味深く聞かせて頂きました。

・大変勉強になりました

5. 今後、教養教育院FDで取り上げて欲しいとお考えのテーマがあれば、ご記入ください。

- ・他大学の教養教育の実施体制について

- ・分野別（語学系、自然科学系など）のFD

- ・専門教育との接続について、それから、専門教育を学ぶ学生の視点で、学びなおしを希望した時の教養教育のサポート。特に英語教育については、専門に上がってからその必要性が強くなってくるので、学びたいと思った時に教えてもらえる仕組みを考えたいです。例えばオンデマンド教材とか。

- ・あれやろう、これやろうが多く、教員の負担ばかり増えて、結果として教員の時間のなさから、授業の深堀りや質の保証ができない状況が生まれ、悪循環が増えているように思える。これからの学生さんらは自立して自分で考えて行動するべきであり、それを促すシステムづくりが必要であると思われる。やらない、考えない学生は留年するのもやむなしで、全ての学生をケアしようとする甘やかしが、結果として、教員も学生も不幸にしているのではないのでしょうか。

富山大学教養教育院 FD活動報告  
令和4年度第3回FD研修会

教養教育院教育改善推進委員会

委員長：彦坂 泰正

上田理恵子

片桐 達雄

山岸 倫子

大橋 隼人